

## 質疑応答

### 小田 和（教育法研究会）

ハン・チュンナロンさんにお聞きしたいのが、スライドの 6 ページの辺りで、トップダウンとボトムアップということをおっしゃったのですが、日本の場合は、大阪などを見ていると、教員として就職してから何歳までに試験に合格しないと昇進がストップするなど、結構、トップダウンのほうが管理的な政策がでているし、また同僚性よりも校長、副校長の下に主幹教諭がいて、どちらかという命令系統のようなものができています。私は同僚性のほうが非常に重要で、トップダウンが行き過ぎるとまずいのではないかと、ご質問したいと思います。

また阿部先生のほうに、今日は多様な考え方を保障するような大事なことをおっしゃっていただきましたが、社会科の主権者教育に絡む辺りでは、必ずしも主体的・対話的で深い学びではなく、それこそトップダウンになっているのではないかと。例えば、二つだけ例を挙げると、高校の新科目、公共というのがあります。ここで国への愛情を強制する文脈があります。私は社会科を研究していますが、今まで中学校 3 年生で憲法 9 条との絡みで自衛隊の中身を教えていたのが、今度は中学校 3 年生から小学校 4 年生に 5 歳も前倒しをして、一応、災害派遣で教えるとは書いてありますが、解説を見ると、国を守る組織だと軍事面も小学校 4 年生の子に教え込むんだと。これでは教え込みになっていると思います。文部科学省の政策の中で、一部そのように教え込み型になっているところがあるので、こういうところは教師のほうで、もう少し多様な考え方を教えてあげてほしいなと思うので、その辺りをお答えいただければと思います。どうもありがとうございます。

一つだけ、秋田県は主幹教員を置いていないというので、ぜひそういう面で先ほどおっしゃった 40 人学級、一般の教員を増やしたほうが良いという意見が結構あるので、その辺りを差し支えがなければお願いします。

### チュンナロン大臣

このトップダウンということですが、STEM、科学、技術にフォーカスするためにカリキュラムの見直しをしたいということでしょうか。批判的な思考、アクティブラーニングの導入、教員研修、これらはトップダウンでできると思います。しかし、トップダウンは必ずしも学校の現場でやるわけではないと思います。

カリキュラム、教科書、教材も大変重要です。時にカリキュラムの目標設定もします。アクティブラーニングを学校で導入すると決め、例えば算数、文学、科学をどうやってアクティブラーニングに統合するか、そういうところはトップダウンでできると思います。

教師のトレーニングがありますが、教師は実際の現場ではそれを実践していません。アクティブラーニング、新しい方法が入ってきたときに、教師はどう感じるでしょうか。もっと努力しなければいけない、もっと多くの時間をかけて研究しなければいけないと思うわけ

です。教科書を使って教えるだけでは十分でないからです。つまり教師はもっと努力をしなければいけません。これが意味するのは、実際に現場で実行するためには、校長、教師のリーダーがそれを理解していなければなりません。また、関わる教師がトレーニングを受けなければいけません。だからこれをボトムアップとっています。ボトムアップというのは、現場の教室で、学校のレベルでということです。時には、そういった取り組みをしているところもあると思います。実際に、たとえ省庁の政策にはなっていないなくても、いい教師がアクティブラーニングをよりよく使って指導する方法を理解していることもあります。そういった場合は他の学校にも、そのベストプラクティスを横展開し、更に重要なことは、教師のプラットフォームを持つことです。アクティブラーニングといっても、人によって、科目によって、いろいろなやり方があるわけです。アクティブラーニングを算数でどうやって教えるのか、それは文学、国語の教え方とはまた違います。処方箋があっても 教師は部分的にしか取り入れないかもしれません。そこで、イノベーションです。ある教師は「オーケー。自分はこれを活用する。」と言うかもしれません。一方で、「いいえ、自分はアクティブラーニングの方法は必要ない。自分独自のやり方がある。」という教師もいます。おそらく、より良い学びの成果が出れば、どちらでもいいかもしれません。

だから、トップダウンとボトムアップを調整することが重要です。しかし調整の方法に関しては、政策、カリキュラム、批判的な思考力や問題解決に何を求めるかについて理解している教師のリーダーたちが含まれなければいけません。また、実際に教室で実践されるようにしなければいけないし、実践のために教師や校長などもトレーニングされなければいけないと思います。基本的にこれが調整です。以上になります。

## 阿部教授

最初に、トップダウンとボトムアップについて、秋田県の教育などを例にしながらお話ししたいと思います。

私は、学校や教師集団が、良い方法・優れた教育方法を少しずつボトムアップで上に上げ広げていく方法も大事だと思います。ただ、一方では最新の教育方法や教育システムをある程度、教育委員会がリーダーシップを取って提案していくトップダウンがあってもいいと考えます。ボトムアップでないといけないとか、トップダウンは押し付けだとか、そういうことではなくて、両方がうまく回っていくことが大切だと思います。少なくとも秋田県の教育はそうなっていると思います。

無理なトップダウンというのは、やがて現場では破綻してきますので長く続きません。文部科学省がリーダーシップを取ることもいいと思うのですが、無理な押し付けをすれば、現場が破綻していただけですから、実際に長続きしない。その辺は、きっと文部科学省の皆さんはデリケートにやってくださっていると思います。少なくとも県レベルでいうと、やはり教育委員会のリーダーシップは、秋田県ではそれなりに強いと思います。

ただ一方では、先生方が共同研究を展開し、主体的にさまざまなアイデアを出したり、方

法を考えたりということも盛んです。それを逆に教育委員会が気付いて、他の学校に広めるなどということもあります。トップダウンとボトムアップ両方がうまく機能することが大切です。このことは午後のパネルディスカッションでも少し議論されてもいいと思います。もちろん、そんな理想的に全てがうまく行っているわけではありませんが、トップダウンとボトムアップがうまく構造的に組み合わせることが必要ではないでしょうか。

2点目です。今日は社会科教育、主権者教育のことをお話しませんでした。私は基本的には、例えば歴史にしても地理にしても、多面的・多角的な見方を学ぶということをかなり重視しています。今回の学習指導要領でも、そういう部分は重視していると思います。本来は歴史事象についてもさまざまな見方があるわけですから、さまざまな見方を子どもたちが学びながら、どの見方が自分としては妥当かをリサーチしながら見つけていくといった授業が望ましいと思います。

先ほど少しフィンランドの話をしました。フィンランドの歴史教育は、実際に授業を見ましたが、多くがそういうかたちで進められているようです。フィンランドのユバスキュラ大学ティーナ・シランデル教授が言われたことですが、フィンランドの社会科(歴史)では、全ての子どもが小さな歴史学者になると。先生はある歴史的事象についてのさまざまな見方を子どもに与える。その中で、どの見方が今の自分としては妥当かということ、リサーチをしながら子ども自身が決めていく。もちろんリサーチが不十分であれば先生は助言しますが、この見方が正しいなどと押し付けるのではなく、子どもが選ぶ。また学年が上がれば別の見方になってくることもある。

主権者教育とは本来そういうものであるべきです。主権行使とは、多様な見方・考え方の中から自分が主体的に選択するということから、そういう社会科でなければいけない。もしそれを阻害するような教科書やプログラム、カリキュラムがあるとしたら、それは改めなければならないと思います。

社会科の先生方に少なくとも言えることは、日本では教科書は地域で採択され、その地域の学校では一つに決められています。通常は教師はその教科書だけしか見ませんが、採択された教科書だけでなく、いろいろな会社の社会科の教科書を見てみる。それだけでも教師の教材研究や指導の仕方は豊かになります。それは国語でも理科でもそうですが、そういったことは意外なくらい行われていません。先ほどの教材に対するアプローチ・教材研究という点でも、そういうことも非常に重要ではないかと思います。

最後に、主幹教諭のことですが、実は最近、秋田県も主幹教諭の制度を取り入れました。でも秋田県の場合は同僚性が高くて、主幹教諭だからといって権力的に動くのではなく、役割分担としてその役職を担っている場合が多いと思います。また、校長職も必要だと思います。トップリーダーとしての校長という職階は必要です。ただし、校長は権限を持っているから教師は黙って言うことを聞けというようなことではなく、役割分担としてリーダーシップを発揮する校長である必要があります。教頭も主幹教諭も、上下関係ではなく、その役割が実際に学校の中でどう生きているかということが大事だと思います。ありがとうございます。

ざいます。

### 徳村 朝昭（国際協力機構（JICA）国内事業部）

しばらくの間、研修にも関わっていきまして、対話や競争という切り口で人材育成に関わっていて、アクティブラーニングにもかなり関心を持っています。

スライド14のところで、JICAの研修の中でも振り返りを取り入れようという話があり、よくやりますが、メタ的に振り返るといふご説明が今回の発表の中でよく分からなかったもので、補足して説明いただければと思います。よろしくお願ひします。

### 阿部教授

ありがとうございます。メタ的に振り返るとは、いくつか意味があると思います。

例えば、国語科の授業でいうと「こういうことがわかったね」「こういうことが学べた」というだけで授業を終えずに、「これは今後俳句を詠むときにどのように方法として使えそうかな」「次にどう応用できるかな」などを意識させることです。先ほどのコノテーションですが、表の意味だけではなくて裏の意味があつて、「言葉には、表の意味だけでなく（文化的な）裏の意味もあることにこれからも気付けるといいね」など、そのように他に転化できるようなものとして確認することです。数学でも、そのときに解けるようになったというだけではなく、「今回はどういふ公式、どう方法を使つて解いたのかな」「今までと比べて何が新しいのかな」と、もう一回、自分たちの学びを別の視点から考え直してみるとかですね。説明文でしたら、「今までやってきたことと何が違う？」と問い直す。すると、序論というのは「問いかけ」「問題提示」だけかと思つていたら、「導入」的な役割、読者に興味をもたせる役割もあることがわかったなど今までの学びに比べて新しく分かつたことを、メタ的に（上位から）意味付ける。また、今まで学んだことと、これから学ぶこととの関係性を顕在化させるというの、メタ的な学びだと思ひます。

さらにいえば、社会科でも実はこれは今、実際に国連で問題になっていることにつながるんだよとか。今、新聞で賑わせている、オリンピックを招致すべきかすべきでないかということとも、実はつながるんだよというように、社会的な文脈に今学んでいることをつなげるのも、私はメタ的な学びだと思ひます。

その要素を大事にするかしないかで、学ぶことの意味が大きく変わってきます。そういう点で系統的な学び、文脈的な学び、社会的な学び、世界とつなげる学びなどとして意味付ける、そういったことがメタ的なリフレクションだというように私は思ひています。

繰り返しになりますが、教師のかなり豊かな教材研究がないと、これがかたちだけの振り返りになる、ということではないかと思ひております。

### チュンナロン大臣

学習方法についてですが、アクティブラーニングとか探求型といういろいろなアプローチ

があると思います。例えば、私が行ったある学校では、子どもたちに教えるときは、教科ごとではなくて総合的な教科のようなかたちで教えています。彼らはそれをファンダメンタルズ（基礎的な項目）と呼んでいます。例えば数学、物理、化学、環境というように。今、阿部先生がおっしゃったように、学びを学校の外で起こっている社会問題の解決方法に関連付けることが重要です。そして、グループごとにテーマを選んでもらいます。経済を選ぶグループもあれば、環境をテーマにするグループもあれば、貧困の問題を扱うグループもあります。

経済を選んだグループには、カンボジア経済についての一冊の本を渡しました。1年後、その生徒たちで集まって自らの視点からカンボジア経済についての本を執筆しました。しかし、先生がそれをどのようにやるか、データ収集や分析方法を指導する必要があります。生徒たちは外に出て、実際の生活の経験から物事を考えてデータを集め、カンボジア経済についての本を執筆しました。そして、自分たちの視点で他の学校の生徒のために本を印刷しました。

別のグループは、どのようにゴミをリサイクルし、経済を助け、廃棄物管理の問題を解決するか考察しました。彼らは解決案を提案しました。解決策はもしかしたらビジネスモデルにはならないかもしれないし、あるいは持続可能ではないかもしれません。しかし、少なくとも課題を解決しようという取り組みにはなりますし、これはアクティブラーニングの一つの形だと思います。いろいろな形があってもいいと思います。

別の生徒は、物理といった教科を公立の学校で学んでいました。それから、その生徒は自分で準備・研究をして、それをまとめて、他の生徒のために印刷しました。その生徒は自分の考えを示せたことを誇りに思いました。単に先生だけでなく、生徒も自分で研究し、冊子にまとめてみんなに配ることもできるわけです。ですからこのようにものを書くということも学ぶ形の一つだと思っています。ありがとうございました。

## 阿部教授

一言よろしいですか。今、大臣のお話の中でいうと、私がこの資料の大きな18ページの左下の15ページに、秋田の探究型というのを、一つのアクティブラーニングのモデルケースとして出しましたが、これはあくまで一つのモデルであって、これだけがアクティブラーニングだということではありません。今、大臣がおっしゃったように、リサーチ型で子ども自身がもっと自分でさまざまな方法まで考えてというかたちもあり得るということです。

ただそのときに、私のレジュメの次の大きな20ページの左下の23ページですが、そこで子どもが1人ではなくてグループの中で対話しながら、そこで異質な見方が出てきたり、連鎖的に新たな見方を生んだり、そのことについて考え方の相違があって、そこでディスカッションができるような環境をつくっていく。そこは放任ではなくて、教師がリサーチグループにある程度アドバイスをしていくといったことは必要です。

さまざまなかたちはあっていいのですが、例えば 23 ページのようなこういう要素は、アクティブラーニングでは押さえておかないと、先ほど申し上げたように、下手をするとリサーチやディスカッションに時間ばかりとって、結局学びが極めて薄かったということも起こりうる。逆に、教師が丁寧に説明すればよいだけのことを、時間ばかりかけていてもやはり意味がありません。

そういう点に留意さえすれば、さまざまなアクティブラーニングのあり方があっていいと私は思います。

### **Lee, Ka Lun (Yidan Prize Foundation)**

教育に関わる皆が、どうやってアクティブラーニングを教育現場に導入できるか、常に知りたいと思っております。例えば前提条件としては何が必要か、教育現場としましてはアクティブラーニングを導入するには、まず何が必要か教えてください。お二方をお願いしたいと思います。

### **チュンナロン大臣**

私は教育大臣に就任する前に財務省に勤務していました。私は投資家から話を聞いていました。投資家は、ハードスキルもソフトスキルも必要だと述べていました。彼らは、「学校で訓練していることは、ビジネス界のニーズを満たしていない、なぜなら、我々には、ただ単に指示に従うだけでなく、思考できる人材が必要であるからだ」と述べていました。私は、どのようにしたら、そのようなスキルを身につけられるのかと考えました。

そして、私たちは、次世代の学校と呼ぶものを創設することを決断しました。まずは教員の研修が必要です。学校で雇用する教員向けの試験を導入しなければなりませんし、教室により投資が必要です。例えば色別に塗られた教室をつくって、国語、文学の授業は赤、生物は緑、物理は青というように色分けをして、また実験室やコンピューター室など、いろいろな設備も充実させることが重要です。まずそもそも教員がコンピューターを使えるようにならなければなりません。ただ単にコンピュータースキルを身に付けるだけではなく、ITの授業だけでなく、学習全般にコンピューターを導入するということです。デジタルツールもその部分となります。

それから、私たちは生徒たちが、クラブを設立し、様々なディスカッションを行うことを奨励しています。更に重要なのは指導法だと思います。私はそのような試みを行った学校を訪れ、また 1 年後に再訪し、保護者の方ともお会いしましたが、全て生徒主体になっていました。もちろん教員がアドバイスをしたりしますが、あくまでも生徒主体で司会をし、保護者のためのファッションショーなどのイベントを組織していました。私たちは、保護者に対するインタビューも行いました。保護者も積極的に話してくれました。

指導法を変えただけで、たった 1 年で、生徒の姿勢がこれだけ変わったことに大変驚きました。生徒は積極的になり、対話の機会も増えて活発な学校になりました。グループ内の

対話だけではなく、グループ同士のいい意味での競争も促しました。間違いがあっても、間違いをおかした場合は、なぜ間違ったのか振り返ることも奨励されていました。哲学的にいきますと、ある時に失敗と呼んでいたものが、将来は真実になり得るわけです。しかしそのためには思考を重ねることが大事です。

その後、親御さんに意見、感想を聞くと、子どもが変わったと皆さんがおっしゃいました。以前はあまりいろいろなことに関心がなかったのに、家の中でも子どもがいきいきしてきたと親御さんも誇りを感じていました。つまりソフトスキルを教室で教えられるわけですが、そのためには教員の養成、資質の向上、また、一気に刷新はできませんが指導法を試してみることが必要です。最初は従来型の指導をしてもらい、動画を撮って自分の振り返りをする 것도大事です。これでは良くない、もっと改善しなければならぬと、教師自ら改善するということが大事です。

学校の文化や環境を新たにつくり直すということも非常に重要です。改善にむけたインセンティブを作りださなければいけません。強制はできません。つまり、心の底から納得して、このほうが良いと思ってもらわなければいけません。これは授業者と学習者の両方に見えることです。1年後、教員は新しい指導法について多くを学びます。生徒達も多くを学びます。教員も、生徒も、両方に学びがあることが大事です。そして学校全体がより良くなる、認知度も上がる、これは学校の管理職にとっても重要なことです。学校の評判が上がることも重要です。また成果が上がる、特にソフトスキルに関して成果が上がるということが非常に重要です。もちろん全ての学校で可能だとは思いませんが、何らかの環境が必要でしょう。財源、予算もある程度必要でしょう。本当に熱心なコミットメントを示す学校と、教員レベルでのコミットメントも必要です。抵抗を示す人も必ず出てきます。「なぜそれをやらなければならないのか？現状で良いではないか」という抵抗に対してのマネジメントが必要です。まずは成果を見せるべきです。結果を見せずに、大規模に実施することはできません。それから、コミットしている人々を奨励します。経済学では、デモンストレーション・エフェクトと言います。もし、付加価値を付けることができるのであれば、デモンストレーションとして見せなければなりません。やりたい人は率先して実行します。例えば、教育省では、良い学校、優秀な教師、優秀な学校長を教育賞として表彰などもできますが、強制はできません。いかに投資をしても、コミットメントがなければ成果は出ませんから、基本的に学校の文化を変えろということが非常に重要です。

## 阿部教授

一つ目は、ハン・チュンナロン大臣もおっしゃったように、大学での教員養成が非常に重要だと思います。やはり教員養成課程で、アクティブラーニングを普通にできる学生を育てていくことが一番効果があると思います。そもそも、そういう意味では大学の教員自身が、アクティブラーニング型の授業ができていなければ指導ができません。自分の大学の授業が旧来の講義型で、学生たちにアクティブラーニングの授業をきなさいと言っても説得力

がありません。

自分のことをいえば、私の大学での授業はほとんどアクティブラーニング型です。そういうことを経験させ見せながら、実際に学生にさまざまなアクティブラーニングの方法論を指導しています。また、学生同士が実際に模擬授業というかたちで授業をしたりするなど、そこでスキルアップさせていきます。教材研究を深めさせたり、授業を批評させたりすることも大切です。大学院そして大学の学部の教員養成課程でアクティブラーニングができる教師を育てていくということが、一番重要なことであると思います。

二つ目は、これは大臣もおっしゃったと思いますが、現場の教師のためにいかにアクティブラーニングの研究、研修の機会をつくることができるかです。これはある程度、教育委員会がリーダーシップを取って行うことも大事だと思います。もちろん校内で校長先生や研究主任がリーダーシップを取ることがあっていいと思います。リーダーシップを取って、アクティブラーニングの授業を見る機会、実際にアクティブ・ラーニングの授業を行う機会を増やしていく。

先ほどデモンストレーション・エフェクトの話をされましたが、いいアクティブラーニングの授業を見ると、他の先生方は自分もやってみたいと思うのです。ただすぐにはできない、ではどうするか。先ほどの共同研究です。できる人と一緒にチームをつくって、若い先生をフォローしながら進めていくとできるようになる。できたときの喜びというのは教師としては何ものにも代えがたいです。またやりたくなると思います。そういう点で教員養成課程と、現場でのそういった研修の機会、チームによるフォローアップで、そういうことができる教員を増やしていく。

もちろんハン・チュンナロンさんがおっしゃったように抵抗する人もいます。いいじゃないですか。どの世界にも抵抗する人はいます。それはそれでいいと思います。しかし、大部分の人たちはアクティブラーニングの授業をやってみたいと思うし、できるようになります。そういうかたちで広げていくのです。例えば秋田県ではそういうかたちで広がってきました。大学でもやっているし、現場でもかなり共同研究をしています。県内どこへ行ってもレベルの高いアクティブラーニングの研究会がある。そういう状況の中で、この15年ほどで、県内のどこに行ってもどの教師も、ほぼアクティブラーニングの授業ができるようになってきたという状況です。ありがとうございます。

### **KATUNGYE, Michael (Embassy of Uganda)**

アクティブラーニングについて、わたくしも大変わくわくする思いで聞いておりました。

インターネットのジョークで次のようなものがあります。ご存じでしょうか。ある場面を再現した動画ですが、裁判で教育現場について問われており、既にご存じの方が何人かいらっしゃいますね。弁護士の議論として、世界が求めるスピードで教育現場が進んでいないと。弁護士のいうところ、結論として、どんなに質のいい政策があれ、アクティブラーニングについてどんなに方針が実施されても、最終的には同じ試験を通らなければいけません。神が

授けたスキルを試す試験がなく、結局 50 年前と同じように地理が教えられ、試験が行われます。わたくし自身は教育者ではありませんが、少なくともウガンダにおきましては、子どもたちはフランス革命についてよく知っていますし、それからウガンダですから、イギリスのことを何でも知っています。おそらくウガンダの政治よりもトランプ大統領についてのほうが詳しいと思います。なので、教え方についてはどう思われますか。

### チュンナロン大臣

論点は二つあると思います。まずはカリキュラムの基本となっているのは、もしかしたらウガンダの場合はいまだにイギリスの教育制度の影響があるのではないかと思います。例えば教科書はオックスフォードやケンブリッジ出版ではないかと思います。それ自体が課題ですね。私が遠隔地、過疎地の学校を視察しますと、教科書の中に北極とありますね。カンボジアの過疎地の子どもは北極について全くピンとこない。しかし教科書には書いてある。したがって、カリキュラムと教科書を取り巻く環境に合わせなければならないと思います。ですからライフスキルが重要になってきます。農業が盛んな地域では農業のスキルを身に付ける必要があるということで、多少のミスマッチがあると思います。教育が周りの世界についていっていない。経済でいいますと、労働市場の硬直化、弾力性がないという表現があります。私が経済を勉強していた当時、なぜ労働市場が経済のニーズにあまり対応していないのか理解できませんでした。教育大臣になって投資家が何を求めるかということも考えました。彼らはハードスキルだけではなく、ソフトスキル、また問題を解決するための批判的思考力を求めています。

二つ目ですが、先ほど試験の話が出ましたが、試験ではソフトスキルは評価できません。試験はあくまでもハードスキル、数学や歴史や地理についての知識を評価するのが試験というものです。それではどうやってソフトスキルを教育現場に組み込むかということが問題です。学校で起業家になるためのスキルを教える、そして試験にどう反映するか、それが試験の限界だといえると思います。

このような理由から、フィンランドでは試験はあまりやらず、評価に基づいているのだと思います。学校の先生はよく子どもを見ていて、ソフトスキルとハードスキルを備えているかどうか、優秀かどうかわかります。よって、全国試験は必要ないということになります。そこで判断力を兼ね備えた質のいい教員と全国試験ではなくて教室が評価の場として機能する強力な教育システムが必要になります。教員がソフトスキルとハードスキルの両方を見ることができることから十分といえるのです。私は、ソフトスキル評価を全国規模の評価に統合する必要があると考えます。ソフトスキルを知識やハードスキルと共に何とか試験に反映しようとしても、それは十分にはできないと思います。ありがとうございます。

### 阿部教授

一つは大臣がおっしゃったことがそうだと思いますが、もう一つはやはりそういった批

批判的思考力や問題解決能力、メタ認知能力などの力をつけていくためには、従来とは違った評価の方法を考えなければいけません。私は、批判的思考力・仮説設定力などを発揮しないと書けないような課題・問題を与えて、かなりの時間をかけて論述させることが必要と思います。そうすると、その子どもの論理的思考力や批判的思考力やメタ認知力が見えてきます。

その代わりに良い問題を出さなければいけない。例えば、格差是正の事象について、A という政策と B という政策があり、あなたはどちらの政策を支持するか、その理由を具体的な事例を挙げながら、こうこうこういう条件で答えなさい、という、単なる知識だけでは答えられないですね。

さらには文学でいえば、二つの似た作品を出して、あなたはどちらの作品が優れていると思うか。その根拠を作品の構造やレトリックや書かれ方をもとに論じなさいなど、子ども自身が実際に批判的思考力やメタ認知力や問題解決能力などを発揮しないと答えられないような高度な論述試験を考えるしかないと思います。

それは今、世界でも考えられてきていますし、文部科学省も少しずつ高度な記述式試験ということで、それに近づけようという努力をしています。まだまだトライアルの段階ですから、十分な成果は見えていませんが、そういう点で、そのようなかたちの論述試験をさまざまに工夫していく必要があると思います。それは近いうちにできるようになると思います。

もう一つは、そうやって論述したものをどう評価するかという評価側、教師側の基準ですね。ルーブリックなどを使って明確にある程度、誰が評価しても安定的な結果が出せるようにする。A先生が評価すると良くて、Bの先生が評価すると悪かったというのではなく、誰が評価しても一定の力が測れるような評価基準を明確にしていく。それを実はまだ確立できていませんので、今教育界ではそれを確立しようとしています。おっしゃるとおり、従来型の大学入試のパターンでは、実際の現場は変わりませんし、その評価の仕方から改革していかなければいけません。私自身も研究していますが、そういうものをこれからつくっていく必要があると思います。大変、鋭い指摘だなと思います。